

製本のススメ

Vol. 50

春うらら、街中が新品の香り漂う季節に、なんと【ススメも50回！】を迎えました。順風満帆とは言い難い景気ですが、新たな気持ちで進んで行きたいと思います。

今回も紙選びのお話（見返し用紙）

冊子によっては見返しをつける場合がありますね。簡易製本などに付ける場合にはあまり気にならないかもしれませんが、実はこの見返しには**重大な役割があります**。その為に安易な紙選びは禁物です。

ホットメルトという糊が出来る前は、並製本の殆どが針金綴になっていました。当然、表紙をめくると喉側に針金が見えて見栄えが悪くなる為に、見返しを貼り針金隠しに使用しました。また高級感も出るので、こぞって見返しを付けた時代があります。本来見返しとは、**本と表紙を繋ぎとめる極めて重要な部品です**。特に上製本では、表紙と本文を見返しのみで繋ぎとめます（ホローバックの場合）上製本は表紙が堅牢で、その分重さがありますので、しっかりとした用紙で、且つ**厚みのある用紙が不可欠です**。

上質ならば110k（四六の場合）以上 色上ならば特厚以上 レザックやラシャコットンなどもそれらに準じて、用紙の厚みを選びましょう。前回は書きましたが、新たん紙のように用紙にシワがあるものは、見返しに（表紙も）不向きです。

もう一つ、見返し部分には**冊子のお洒落を担う**という役割もあります。表紙を開けた時に、キラッと光る冊子作りのセンスを発揮できる場所でもあります。写真集ならば見開きの表現が可能ですし、地模様のある用紙も面白く、まるで羽織りの裏地の如く表が地味でも、裏が派手！というような江戸っ子の心意気も発揮できる場所です。西洋の古文書などには、見返しを革で作っている本も多くあり、それほど重要な部分と言うことですね。表紙のデザインも重要ですが、見返しで手を抜くと良い本にはなりません。個人で本を作る方々の多くは、【初めて作る】場合が多いでしょうから、ぜひちょっとしたアドバイスで冊子が引き立つ事も教えてあげてください。



Teabreak

世の中には不思議に思う事ってありますね。例えばヘビの尻尾って何処からでしょう？調べてみたら、腹側に肛板と言うウロコの（肛門）場所がありそこから先が尾になるそうです。種類によっても違いますが、ほぼ数センチ～20センチくらいだとか・・・。

でも、ヘビを捕まえてひっくり返すなんてムリ！ムリ！ぜったい無理！です。

by (株) 井関製本